



編集・発行 日本オーボエ・クラブ広報委員会  
東京都豊島区西池袋3-25-2大晴ビル 葉西池店内  
会報関係の連絡先  
〒241 横浜市旭区本村町17-1-612 安原理喜  
郵便振替「日本オーボエ・クラブ」東京 9-89563

第4号 1987年4月25日

不許複製

## 第2回総会・新年会

さる2月15日、すでに案内の通り、東京・池袋「葉しおり」にて第2回総会並びに新年会が催された。約30名の出席者と多数の委任状により総会が成立し、まず東フィルの斉藤勇二氏が議長に選出され、会計報告、会則の一部改正、新役員選出を1時間ほどの間に終了した(各項目参照)。引き続き、同店の好意により貸切での新年会に移り、2時間の余りの間、それぞれに旧交を暖めたり情報の交換、楽器やリード論議に花を咲かせ、9時過ぎに各々2次会や、趣味の中国式室内楽へと散会した。

### 会則一部改正

総会で以下の通り日本オーボエ・クラブ会則の一部改正が承認された。

第4条(役員) a  
旧) 運営委員 15名  
新) 運営委員 15名程度

旧会則では運営委員の人数が限定され、選出や補充をスムーズに行なうために新役員選出時より適用される。なお、その他の会則には変更なく現行通りである。

**EHを探してください!**

3月30日16時半頃、地下鉄銀座線・表参道→三越前間にてラリリーEHを網棚に置き忘れる。セミオート/フル装備、楽器に刻印なし。黒ビニールカバー付きEHシングルケース(内にラリリーの刻印)。使用6年目。

## 本年度新役員

第2回総会にて新役員への立候補者はなく、議長提案により旧役員の留任が満場一致で可決された。ただし、3月24日の運営委員会にて、病氣療養中の熊田明宏氏(日フィル)に関しては本人の負担を軽減するため本年度の役員とはせず、また、監事に関しては当分の間空席とし、昨年度の監事は運営委員に統合された。結果、本年度の運営委員は計17名となった。

運営委員 安藤禎章、石橋雅一  
伊藤博、今井薫、大隅量子  
改田晃、河野剛、小島葉子  
佐野直樹、高橋勇美、虎谷迎悦  
似鳥健彦、本間正史、安原理喜  
山本安洋、山本洋一、吉成行蔵  
会計監査 北島章、佐藤順子

### 各小委員会の役員

太字は各責任者

#### 事務局

(書記) 高橋勇美。  
(会計) 伊藤博。  
(総務) 山本安洋、安藤禎章  
今井薫、佐藤順子  
佐野直樹。

#### 広報委員会

安原理喜、伊藤正文、大矢高士  
北島章、猿田博、高井美香  
本間正史、前川光世、三矢幸子

#### 企画委員会

改田晃、石橋雅一、河野剛  
斉藤勇二、山本洋一、吉成行蔵

#### 推進委員会

似鳥健彦、大隅量子、小島葉子  
虎谷迎悦。

## うわさのハンスクロイル

4月10日、最近著しい改良を重ね、さらにマリゴー社の株を握ったと噂される西独ハンス・クロイル社々長、ハンス・ヨアヒム・クロイル氏(34歳)が来日し、広報委員会のメンバーと楽器の試奏、インタビューに答えた。

### マリゴー社に関して?

「確かに、昨年来、私は個人的にマリゴー社の経営権を百パーセント握っています。が、両社はあくまで独立した会社であり、長年の経験や技術を交換することはあっても、互いに独自の楽器を製作すべきです。」

### 楽器製作に関する基本姿勢は?

「仮に、製作者には自信作であっても、必ずしも演奏者には満足できる楽器とは限りません。両者がうまく絡みあって初めて良い楽器ができるのだと思います。製作者は常に演奏家の要求に答えられなければならない。また、答えることによって、演奏者に新たな要求が生じるのだと思います。」

最近のクロイルはかなりフランス的な楽器に近付いたと思うのですが?

「その通り。演奏者の要求を追求した結果で、伝統的なドイツの楽器製作も転換すべきだと思います。でも、私達はウイナ・オーボエも作っているのですよ(笑)」(関連記事12頁)

役員会報告

事務局	企画委員会	推進委員会
<p>日本オーボエ・クラブが創会して、早一年が過ぎました。昨年は、あまり主だった活動もないままに終わり、事務局としては比較的楽だった（私自身は昨年あまり働かなかったので、他の方とは比べられません）と思いますが、今期は積極的に活動したいと思っています。</p> <p>まず、会員名簿の再発行を行います。新会員も十数名が加わり、充実した会ができると思います。しかし、会員が増えるに従って、事務局の仕事は忙しくなることは確実でしょう。現在の事務局は、形式的には現住所にあります。本来の活動を現地で行なうことは不可能に近い状態です。地方の会員、また、新しく参加された会員の方々は、会の活動内容がどのように行われているか判らないでしょうし、色々な催しや、会への投稿の問い合わせをどのようにするか判らないことと思います。会費に余裕があり、適当な場所を借りられるならば、事務局もそれなりの対処をすることもできると思いますが、今の状況では困難なことでしょう。</p> <p>今後、事務局としてはクラブが円滑な活動をできるように、また、近い未来にアマチュア奏者の会参加を予想して事務局を充実して行きたいと思っています。思うことだらけでしたが、何か妙案がありましたらお知らせください。</p> <p>事務局長 高橋 勇美</p>	<p>桜もすっかり散ってしまい、お花見は不可能になってしまいました。皆様いかがお過ごしでしょうか。企画委員会は療養中の熊田さんのかわりに斉藤勇二さんと私に加わり、総勢6名となりました。</p> <p>さて、今年度は親睦と研究の2本柱で行くつもりです。まず、親睦としては外来オーケストラのオーボエセッションとの交歓会を予定しております。と言いつつも外来オーケは今年二十数団体もあるため、企画委員会では、日本にあまりなじみのないスタイルの国、例えば東欧諸国とか、近そうで遠いフランスとかはどうかという意見が出ました。さっそくパリ管に当たってみました。日程的に無理でした。こちらでコンタクトをとれば地方会員の方にもそのオケのマネージメントを紹介することができ、地方でも交歓会を開くことができるようになると思います。年2回を予定しています。</p> <p>研究として、オーボエの試奏会の計画があります。最近新しいモデルが次々に発表されていますが、それらを含め、一堂に集めて試奏しようというものです。これにはメーカーと楽器店の協力が必要で、これから交渉して行く予定です。全国規模の企画は現在のところ考えられておりませんが、今のJOCで可能だと思われるアイデアがありましたらぜひお知らせ下さい。</p> <p>企画委員長 改田 晃</p>	<p>推進委員会としては、早く実現したいものとして、プロの演奏家（目指していた人も含めて）の大同団結と、その後アマチュア部門の設置だと思います。オーボエを愛し、オーボエを持っている者が、手を握り合う場としてこの日本オーボエ・クラブが役に立ちたいと思いますし、当然その結果アマチュアを含めることになるわけです。</p> <p>「クラブに入って、何が得になるの？」という素朴な質問もよく耳にしますが、これも会員の声を取り入れることによって、単なる親睦のみならず「よしあし」を読んでお解りのように、ルーツを探ったり、新製品の紹介とか、会員の動き、世界のオーボエ界の動きなども、報告し合う場になったら大変素晴らしいことだと思います。</p> <p>将来、アマチュアの方にも参加してもらい、機関紙への関与と、情報・資金面でも、かなり有利になると思いますので、アマチュア・オーボエ連盟（協会だったかも知れません）の方々とも近々話し合ってみようと思っています。少し時間がかかっても、落伍者でないクラブ、これが今の私のモットーです。</p> <p>推進委員長 似鳥 健彦</p> <p>5月20日夜、東京・渋谷近辺にて「シェレンベルガー氏を囲む会」詳細は別途通知します。企画委員会</p>

広報委員会	会報の発行以外	の委員会に引きずり込んだ方々で、
<p>昨年度の「よしあし」は発行の遅れが目立ち、しかも書き手が毎度同じで、記事よりも広告の方が多い、と不評だった。ぜひその責任を取り「よしあし」編集長を辞したい、何よりも遊び以外での徹夜を減らしたい、と考えていたのだが、目下（これからは違うことを期待するが）、</p>	<p>会報の発行以外ほとんど動きのない当クラブから会報の発行が消えたら、ムムこれはヤバイ、と勝手に一人合点して、頼まれもしないのにまたこの役職に立候補してしまった。ただし、今年度のみという条件付なのでご安心ください。</p> <p>さて、昨年度の反省を踏まえ、前頁でもお分りのように、広報委員会のスタッフは5名から9名へと倍増した。それなりの理由があって、こ</p>	<p>の委員会で働いていただく。</p> <p>昨年度は新入会員や住所変更のミスが多かった。編集部自身の不手際もあったが、事務局との連携の悪さも大きな原因であり、根本的には特定の事務所がないため、書類・資料等が一カ所で管理できないことにある。ご迷惑をおかけした方々にはここで改めてお詫び申し上げます。</p> <p>広報委員長 安原 理喜</p>

&lt;新入会員&gt;

&lt;住所変更&gt;

取 入	¥ 962,980-
会費 正会員	¥ 314,550-
賛助会員	¥ 469,080-
公告料	¥ 155,440-
準備会残金	¥ 4,460-
総会残金	¥ 19,450-
支 出	¥ 477,550-
機関紙発行	¥ 256,150-
原稿料	¥ 37,590-
会議費	¥ 34,230-
通信費	¥ 41,410-
事務費	¥ 81,865-
印刷費	¥ 15,123-
雑 費	¥ 11,180-
差し引き残高	¥ 485,430-

事務局作成

## パリ・オーボエ研修報告

日本ダブルリード株  
萩森弥都夫

1987年初め、技術研修にパリを訪問しました。運悪く異常寒波と交通ゼネストにでくわしてしまい、「パリはとんでもない街だなあ」というのが第一印象でした。四国育ちの私にとって寒さは大敵、その上、交通の手段が新参者にはてんでわからず、ホテルを移動する時などヤミタクシーに出会わなければ20kmの道のりをゴロゴロとスーツケースを引っ張りながら歩かなければならないところでした。言葉は自他共に認める言語音痴で、外人が来ると逃げていた私でしたが、なんとか辞書を片手にパントマイムで会話を楽しみました。仏語は世界一美しい言葉と言われますが、「サバ」とか「ボラ」という言葉がよく耳に入るのでどこがという感じでした。

パリではリグータ社を中心にそこで働いている工員達の中にまじって勉強しました。まず、驚いたのは手作業ばかりと思っていた作業工程が機械化されており、カギ(Key)のセッティングと最終工程である組み立てのみが

昔ながらの職人芸でした。リグータ社は家内工業だと思っていましたが、機械類も豊富で工員も思ったより多く、若い工員が熱心に朝早くからがんばってました。リグータ社の仕事時間はAM.7:30-12:00/PM.1:30-5:30です。

当初、楽器製作の工程やノウハウは秘密だと思っていましたが、大変あけっぴろげで、何でも教えてくれました。あまりにかたっぱじから質問したために「おまえはエスピオン(スパイ)だ」とよく言われました。あけっぴろげなのはOboe製作はすぐに真似る事ができないからだだと思います。

新しいメーカーはどうしても均一でないし、ボディーの木も若いためトラブルが多く発生します。よほど長い年月をかけ計画を練っていないと安定した製品はできません。ちなみに、リグータ社は1万本作れるストックを持っています。ボディーとなる木は製品になるまでに10年以上保管している計算になります。フランスのOboeメーカーは、伝統を重んじるだけでなく、新しいモデルも開発しています。リグータ社ではまだ試作モデルですが、リークを1本持ち帰っておりますので、諸先生方に吹いていただきいろいろアドバイスをしていただければと思っています。ロー社も最近dmモ

デルを発表し人気を博しております。

最後になりましたが、修理に関してはさほど高度なレベルを要求されていないのか、リペアのすべてが、音が出ない、タンポ類が古くなった、のいずれかの楽しい修理で、ほとんどやらせてもらいました。ただ、いろいろなノウハウが得られないので、楽器を製作するためにはマイナスかも知れませんが。

今回は2ヵ月たらずの短い研修でしたが、少しでもダブルリードの役に立てればと思っています。それにしても、食物とワインは最高でした。



茂木 大輔

日本オーボエ・クラブの皆様

いつも楽しい会報を有り難うございます。ドイツ暮らしも五年を過ぎ、日本からの便りは何よりの楽しみです。安原さん、山本さん、北島さん、木原さんを始め、ドイツ帰りの先輩の人達の活躍を、明日の日本の職探しに困る身として頼もしく思う一方、凄まじい数のオーボエ・リサイタルが開かれていることを知って、日本の層の広さ、レヴェルの高さを思いしらされて、こりゃあ帰っても誰にも相手にされないだろう、と一人落ち込んでしまいました。日本じゃあオーボエ吹きは完全に「足りきって」いるんですね。

バイエルン放送響に結局ふられてからは、バンベルク交響楽団に拾ってもらって、ここ一年はずうっと乗せてもらって、シュタインは勿論、エッセンバッハやデュトワ、ヨーヨー・マなどたくさんタビも連れていってもらいました。メアヴァインというソロ・オーボエの片一方が病氣理由で二番におりたままなので、ありとあらゆる旅は勿論、非常に頻繁にソロのトラが必要なのですが、別にだからといって一人増やしてくれるというわけでもなく、ただシュマルプスカ小生が交代でいつもいる、という妙な状態になっとなります（日本に行ったのは彼です）。やはりさすがの感があり、レヴェルが非常に高く、物凄くたくさんの勉強をさせてもらいました。仲間が非常に親切で、総てこっちの吹き方に合わせてくれるような感じで（つまりどう吹いても合ってしまう）、気持ち良くやらせてもらえたのが印象的でした。実は昨日まで、シュタインとスイスを回って、ドン・ファンやら色々吹いて今日帰ってきたところなのですが、改めて本当に凄いオケ、凄い指揮者だと感動しております。

一方、ミュンヘン音大の講師も続けており、ポンニチなまりのドイツ語で、ドイツの音大で日本人にレッスンを神妙な顔して受けているドイツ人の学生はどう思っているのだろうか。

さて、最後になりましたが、この4月から、Stuttgarter Philharmonikerに入団することになりましたのでご報告致します。オケのランクはA、ポジションは1/3番（実質上の1番）です。オケの内容はシンフォニー・コンサート専門ですが、シュトゥットガルト国立オペラのピットに入ることもあるようです。3月にはオランダ/ベルギー、4月はアメリカ、秋にはフランスに演奏旅行があり、来年は日本に行く予定もあるそうです。しばらく勉強させてもらおうつもりです。住所が変わりましたらまたご連絡させていただきます。今後とも日本オーボエ・クラブの発展と会員の皆様のご健康をお祈り申し上げます。

1987年 2月17日ミュンヘンにて

追伸 ウンチ！という名のけっこう良いリード・リード材製作者を紹介します。

Untch & Sohn  
Staudach 2  
D-8994 Hergatz



1986-12-27 東京ブレーザ-ズリステ

西独で日本人ダブルリード演奏会

西ドイツを中心に、ヨーロッパ在住・留学中の日本人オーボエ奏者8名、ファゴット奏者4名による「東京ブレーザ-ズリステ」が、昨年12月27日、ランツベルク（西ドイツ・バイエルン州）でクリスマス・コンサートを催した。地元紙ランツベルガー・ターゲスブラットは「完成されたテクニック、洗練された演奏」として大きく称賛している。報告・茂木大輔 編集・大矢高士

Ob

茂木大輔 国立音大卒、元新星日響団員、左記参照。

長岡大輔 東京芸大卒、ミュンヘン音大卒、パッシン氏に師事。

藤崎耕三 毎コン入賞、京芸卒、パッシン氏（ミュンヘン）に師事

福田雅夫 パリ音楽院卒、同院オーケストラ団員。

水谷 元 東京芸大卒、ゴリツキ氏（ハノーファー）に師事。

吉岡りえ 東京芸大卒、ヘルムラート氏（ミュンヘン）に師事。

渡辺潤也 京都芸大卒。ローデ氏（ベルリン）に師事。

平木啓一 国立音大卒、フックス氏（チューリヒ）に師事。

Fagott

柳浦慎史 国立音大卒、コルビンガー氏（ミュンヘン）に師事。

入交 滋 ヘンカー氏（ハンブルク）に師事、ハンブルク響団員。

吉田 将 武蔵野音大卒。トゥーネマン氏（ハノーファー）に師事

萩原たかし ブッシュマン氏（ヴェルツブルク）に師事。

プログラム

JSバッハ<フーガの技法より ob, dam, eh, fg.>、ヘンデル<王宮の花火より序曲と舞曲、合奏>、ガスマン<トリオ dam, eh, fg.>、モーツァルト<嬉遊曲変ロ長調 K270。2ob, 2eh, 2fg>、JSバッハ<クリスマスオラトリオよりシンフォニアとアリア 3ob, 2eh, fg>、ベルリーニ<オーボエ協奏曲、Christoph Hartmann, ob-solo>、ダンツィ<トリオ ob, eh, fg.>。

三矢 幸子

北島 章

高井 美香

最近、「女性奏者によるナントカコンサート」「レディスナントカ」といった演奏会のコピーをよく耳にしませんか？ 女性の特質を最大限に活かして、同じきれいな音楽をきくなら、ムサイ男性の演奏よりウルワツイ女性の演奏の方が耳ばかりでなく目も潤う、というわけで、どうも一種のブームになっているようです。何しろ女だというだけで仕事の機会が増えるのですから、私共女性奏者としては大変ありがたいのですが、これは逆差別かもしれませんね。そのうち男性奏者からクレームがつかたりして……。もっとも、誰がどうひいきめに考えたって、「男性ばかりの木管五重奏団」「メンズコンサート」ではおもしろくも何ともない。これではお客が入るわけがない。

ところで我が「キ・モワ」は女性ばかりのオーボエ・アンサンブルですが、このところのブームにのってか、結成以来3年。まだ商売にはならないけれど、定期演奏会2回、ホテルや、パーティのBGM等、おかげさまでずいぶん順調に仕事をさせていただいております。ただ、当初のうたい文句としては《オーボエだけのアンサンブル》を協調していたのに、《女性だけのアンサンブル》ということでの仕事の依頼が多く、それはそれで一向に構わないのですが、単にオーボエ吹きが5人集まればアンサンブルになるというシロモノではない、ということがわかっているのかいないのか……。

さて、『よしあし』の読者のみなさん！ オーボエとダモーレとコール・アングレがいっぺんに音を出したらどんなハーモニーになるか、想像する前にぜひ一度キ・モワの演奏を聴きにいらしてください。オーボエ吹きのあなたにお届けしたい絶妙のアンサンブル。魅惑のひとつときがお楽しみいただけます（フリー）

昨年末、肝炎のため突然入院した。その十日前ぐらいからどうも風邪気味で体がだるく、食欲がない。演奏会の最中もフラフラして、しんどくなる。ちょうどその時に健康診断があり、診てもらったら、即入院ということになった。肝炎という病気はとにかく安静が一番、あとは十分な栄養を採るということで、一日中何も考えず、横になっていれば良いわけである。他から見ればゆうがな生活にも見えるが、苦痛もなく一日中寝ているのもしんどいものである。

約二ヵ月間の入院生活後、しばらくしてオーボエを吹き始めた。これまで二ヵ月も休んだことはなく、いざ吹いてみると他人が吹いているような感覚だ。唇の感覚というのは2～3日でも吹かないとすぐ忘れてしまうが、また元に戻るのも意外と早いようである。ただ、息の使い方というのは、体が衰えているせいかなかなかうまく行かない。特にオーボエという楽器は、他の木管楽器に比べて高い圧力が必要なわけで、そのコントロールが大変だ。昔よく経験したことだが、同じリードでもその日の体調によって非常に重く感ずる時がある。睡眠不足や、疲労気味の時、つついリードが重くなったと勘違いして削りすぎ、失敗したことがしばしばある。また、本番直前になっても良いリードがなく、徹夜でリードを作ったこともあるが、ある程度のリードができて、どうしてもそれに体がついて行けなくなって、うまく行かなかったこともある。よく、リードは生き物だと言われるが、それを吹く人間の方は真の生物であり、すくなくとも人間の方のコンディションを常に最良の状態にしておくべきである。ましてやオーボエは他の楽器に比べ、よりデリケートな楽器であり、なおさらのことでもあるように思う。

(NHK交響楽団)

「熱心に講義を聴くふりをしながら、その実、机の下でリードを巻く」、「他人のノートのコピー数十枚という資料から、初見で、制限時間2時間のうちに人並みにレポートをでっちあげる」、「2分後にはどの文の訳ができていなければならぬのかを瞬時に読み取り、2分間で単語を引いて何くわぬ顔で訳してみせる」……というような訓練(?)を4年間続けてしまった結果として、私は1年前に某大学を卒業しました。日本オーボエ・クラブに入会してわずか1256時間と15分(この原稿を書いている時点で)の新参者が広報委員に迎えられ、「よしあし」の貴重なスペースに自分の書いた文を掲載していただけるのは単に「文」の字のつく学部を卒業しているから、という実に明快(?)な理由。ちなみに、文学部ではアリマセン。

というわけで、「日本オーボエ・クラブと私」などという大層立派な題をいただいて、これで書けとの仰せに、私は犬のおまわりさんのごとく困ってしまいました。なにしろ材料のないところから独創的な文章を創造する訓練はほとんどやりませんでしたから……。

とは言うものの、2月の総会に初めて参加してから、素晴らしい先輩プレーヤーの方々と親しくお話しできる機会も増え、親睦団体たる日本オーボエ・クラブには感謝感激!なのです。(また衆の皆様にも、写真撮影にお店を使わせていただく等、大変お世話になっており、この場を借りてお礼申し上げます)。ですから、もし私にかくれたる文筆の才能があるのであれば、数か月、いや数年後には我が文章力は飛躍的な進歩をとげ、素晴らしい「日本オーボエ・クラブと私」が誕生、エッセイ界に新風を巻き起こすも知れない……という予告のみで今回の文は終わるのであります。(フリー)

リーク・オーボエ・試作モデル  
伊藤 正文 (フリー)

今号より新しい試みとして、複数の奏者による楽器試奏会を企画することになった。すでに試奏依頼が幾つか寄せられているが、今号ではリグータ社のリークとハンス・クロイルを試すことにし、次号以下、数々の楽器を紹介、かつ批評してゆくつもりである。

今回のリーク・オーボエはJDRの萩森氏がリグータ社より持ち帰った一本である(別項参照)。試奏会の参加者は私・伊藤正文、伊藤博、高橋勇美、安原理喜の4名であった。まず、4本の従来モデルに1本の新モデルを混ぜての目隠しテストを行なった。さすがに全員、外見的には全く差異のない新モデルを指摘した。この時点での印象は「こもってますね」、「違いはわかるが特に良いとは思えない」、「第3オクターブが高くなりやすい」、といったやや否定的なものであった。しかし、試奏を続けるうちに、「安定性はある」、「まとまった感じ」、「真中のCも悪くない」、「第2オクターブの上の方が楽、第3オクターブはやや上ずるが出しやすい」といった意見に変化した。

次に、使用者層(初・中級者)を考慮して、市販のリードでアンブシュアによるコントロールをせず、低めの圧力で吹く比較を行なった。その結果、高音のブラ下がりが少なく、音色的により安定する等、従来モデルからの改良が見られた。

結論として、この楽器はバランスよくまとまり、ボディやキイの仕上げも良い。特に、右手キイの間隔が狭い点は、手の小さい中・高生にも使い易いはずである。萩森氏の談話では、このモデルは本来ドイツ向きに開発されたもので、現在、各国で数本が試奏され、その反応により、さらに改良される予定でとのことである。

ハンス・クロイル・試奏モデル  
斎藤 勇二 (東フィル)

先日、ハンス・クロイル社々長を交えての試奏会を行なった(1頁参照)。進行役は斎藤勇二、参加者は伊藤博、北島章、安原理喜の4名で、従来のセミオート2本、フルオート2本、リング・フルオート1本、今回クロイル氏自身が持参した改良型のフルオート3本を日本楽器製造株銀座店にて試奏した。改良型のフルオートは成田空港での通関が遅れ安原氏は試奏できなかった。

以前のモデルより響きの面で柔軟性がある。調整不足のせいかもしれないが、バランスの面でやや難点がある。改良型はメカニックの面で以前より良くなったように思う。ドイツ的な芯のある音色より、より柔らかな傾向になってきた。音色の面では個人差があるので何とも言えないが、音程のバランスも良くなったように思う。低音が下がらないのが良い。全体的に以前より良くなったと思うが、楽器の個性がだんだん薄らいできたように思う。北島章(N響)

音程・音色のバランスが良く、音程がはっきりしている。キイ、特に左手が近くて大きいので押さえやすい。しかし、モデルによって善し悪しの差がやや大きい。改良型はさらにバランスが良く、キイ・ノイズが少ないのが良い。旧モデルに比べてフレゾナンスの鳴りムラが少ない感じ。左のEb、Abのキイを同時に押さえにくいのが難点。マリゴとは違う抵抗感を感じる。伊藤 博(フリー)



チューブ・パイプ・ステーブル

この貿易摩擦の折り、国産ケーンはいまだに絶望的であるが、株東京ミックが国産チューブ<カラムス>を開発した。形状はドイツタイプ、サイズは46mm、47mmの2種類。どうか、使用感、賛辞、批評をお送り下さい。チューブの判定は難しく、時間がかかるので、いつまでもお待ちします。なお、東ドイツ・クロープファー氏はすでに2年前に死去されたとの情報を左記クロイル氏より得たが、いまだに新入荷として国内に出回るのはいかなることか。(RY)

「よしあし」は年3回発行予定  
第5号 8月25日発行予定  
※賛助会員紹介特集号※  
第6号 12月25日発行予定  
※内容未定※  
情報、随筆、演奏会チラシ等を  
編集部宛お送り下さい。

会費未納の方は至急お納め下さい  
事務局・会計

編集後記 先日、とある演奏会が開演5分遅れとしたら、「開演時間を厳守せよ」とアンケートに書かれてしまった。素直に謝ります。また発行が遅れてしまいました。さて、本来ならとくに「よしあし」が印刷完了していなければならぬ5月29日、東京サントリーホールで、昨年末まで生死の境を彷徨った熊田明宏氏に会った。痩せてはいたが、顔はお地蔵様のような笑みを浮かべていた。

2月の総会では一時面会謝絶の伝えられた後藤恵治氏も元気な姿を見せていた。彼等の生命力の勝利だろう。編集をやっている我が家では「あーた、今何時だと思ってるんですか」ばかりで、僕病気になりそう。早く辞めろという有り難い言葉も聞こえていますので、もう1年だけで勘弁して下さい。なお、種がない、という単純な理由で「ルーツを探る」は(しばらくの間)休載致します。RY